

総合科目「現代都市論」のための『ビデオ・アーカイブ』 ～教育研究リファレンスとしての映像メディア～

吉田和比古・高津 斌彰

The Video-Archives for the Lecture of the Contemporary Urban Study as a General Education
～Visual Media as a Reference for Reserch and Education～

Kazuhiko YOSHIDA, Yoshiaki TAKATSU

It has passed almost several years, since we, as a teaching group, began to teach 'The Urban Contemporary Study' in a frame of General Education in Niigata University. Meanwhile we have sometimes discussed to develop the contents of the subject. It is needless to say that this study is very important for the students who gather from various faculties. Because it is very important for them to know many problems about 'urban studies' for example : an improvement of social infrastrucutre, defending to disasters, facilities, more comfortable environment of living in cities, many reformations of concerning laws, polusion of natural environment. One can say that many problems that a human being faces to in modern life are involeved in to a uraban studies.

This paper is a new research which follows the latest paper(1996). This time, it is so characterized that the concernig TV Programs were introduded in this paper as possible as we could find and accumulated as video tapes. More than hundred programms concerning to the subject can be used as a teaching material and many researchers in this subject can refer if they want to know more real and visual problems about cities. With this reason we have named this paper 'Visual Media' as a reference for study and research : so called 'Video Archives'. And this paper is also based upon a financial support that was decided by General Educaiton Centre of Niigata University. We have much thanks to the staffs in this centre.

Key Words : Omnibus form lecture, Contenporary Urban Study, The effective development of teaching aids,
Our working together for new system with students, Audio video as teaching aids a historical
environment as a human environment, Recontstruction of a historical urban sights.

〇まえがき

総合科目「現代都市論」は、これまでオムニバス形式の利点を活かし、担当する複数の教員のそれぞれの専門領域ないし関心領域の範囲において現代都市をめぐるいくつかの問題点を取り上げてきた。〔注1〕限られた授業時間内で現代都市の抱える数多くの問題点にいかに関心を持たせるかという点に関しては、複数の教員のそれぞれの工夫にも大きく依存してきたが、教養教育の中で現

代日本の学生が持つべき関心の一つとしての現代都市の諸問題を扱い、問題意識を喚起するという初期の目的はかなり実現されてきたのではないかと一応の評価をしたい。〔注2〕なお従来の総合科目「現代都市論」は2000年度からセメスター制への移行に伴い「現代都市と私たちの生活」と「現代都市の生活空間とその形成」と科目名が分割されたが、本来の教育コンセプトに大きな変更はない。

さて、開講から数年が経過した現在、今後都市

論にかかわるテーマをさらに扱っていく上にあたり、従来の方法論そしてこれからのマルチメディア時代に対応する新しい授業形態のあり方などをめぐって、現在さらなる質的向上のための教科内容の再検討の時期、すなわち経営学で言うところの、PLAN₁→DO→SEE→PLAN₂というサイクルの中でSEE→PLAN₂の段階にきていると考える。そこで本論では、現在急速に進行しつつあるIT（情報技術）革命の進展とともに展開する情報の多様化の中で、従来の「教員から学生への一方向的メッセージ伝達（one way message）」というある意味では古典的な授業のあり方から一歩踏み込んで、「マルチメディア情報」および「映像メディア情報」をいかに効果的に授業に組み込んでいくべきかという将来を睨んだカリキュラムないしシラバス作成のための基礎研究の一端を報告してみたいと考える。本稿の内容は、前半では総合科目「現代都市論」の総括責任者である高津が、全体を俯瞰する視点から、授業実績例として「都市災害から見る現代都市」について取り上げ、続いて後半では吉田が、現代都市論の授業に幅広く活用可能なテレビ・メディア番組に関する「ビデオ・アーカイブ」を中心に紹介する。なお本研究報告は、1999年度新潟大学大学教育開発研究センターより研究費を助成された「総合講座『現代都市論』の授業充実のための研究開発プロジェクト」の研究成果の一端を紹介するものであり、関係者に謝意を表したい。映像メディア教材の積極的活用はなにも「現代都市論」のみにかかわる問題ではないにせよ、学生にとってより魅力的な大学の教育の内容を充実させるためには、これからの情報化社会の中でどうしても一度は現場の人間として考えておかねばならない切実な問題となるだろうことは明らかである。また「現代都市論」という講義の内容においても高度情報化の時代という状況を視野に入れて、たとえば『情報化を核として都市づくりをどのように考え展望していけばよいのか』といったことも扱うべき主題の一つとなるかもしれない。そうした情報化時代の都市づくりのキーワードとしては、①都市交

通・通信手段の発達にともなうグローバル化②情報化による都市行政の効率化③行政情報の市民への公開と市民からのアクセスにともなう行政と市民とのフィードバック（双方向性）システムの構築、などがあげられよう。以下1.では高津が新しい現代都市論の新たなパースペクティブとして「都市災害から見る現代都市」を映像メディアとの関連から取り上げる。そして2.では吉田が、現代都市論のためのビデオ・アーカイブについてのこれまでの収集データの内容紹介を行っていくことにする。

1 都市災害から見る現代都市—ヴィジュアル映像に見る都市災害と都市住民の在と不在— 〔高津 斌彰〕

1.1. 現代都市論とビジュアル映像

「現代都市論」は、通称であって、現在ある2講義の総称である。従来は、「現代都市論」として通年でなされていたオムニバス形式の講義である。したがって、共通のグループで進められている。「現代都市と私たちの生活」及び「現代都市の生活空間とその形成（2001年度からは「現代都市の住民と生活空間）」との2つの講義に分けられている。前者は前期、後者は後期に開設されている。前期の「現代都市と私たちの生活」は経済学部、法学部、工学部、教育人間科学部からの4名、後期の「現代都市の生活空間とその形成」は、経済学2名、人文学、工学2名、他大学の経済学からの6名で進められた。それぞれ、社会学、教育学、文化論証、法学、地理学、人類学、経済学、財政学、社会学、教育学、都市工学、造園工学などの分野から参加していただいている。

近代都市と異なって、複雑・多様な都市の実状と現代都市問題をそれぞれの専門分野から指摘し、紹介して貰い、それに対する対応の仕方を学生自ら考察して貰うことを目標としている。都市に居住する各主体の組織社会化と彼ら自身による新し

い社会システムを主体的に構築する手法を学んでもらうことを、本講義の目標としている。そこから、「各個人によって主体的な都市生活が形成され、新しい社会システムが主体的に考察され、新しい組織を自ら構築する手法を身につけて貰え」れば、これこそ、望外の喜びであるとしている。

以下の考察は、後期の「現代都市の生活空間とその形成」の一環としてなされた講義から生まれたものである。後期の講義自体は、現代都市づくり入門、南米の都市形成と新しい都市住民・その文化・コミュニティ、現代市民と都市計画、現代都市環境と明日の都市計画、現代都市の経済問題・地価と土地利用、21世紀の都市とそのコントロールの順で行われたものである。

特に阪神淡路大震災が、現代都市論の講義対象に含められたのは、①都市型の災害であったこと、②現代都市の典型的なインフラ・都市施設の過密な社会空間での災害であったこと、③現代都市住民の住民意識が密接に関係する対象であること、④現代社会関係、組織、システムが関与する対象であったこと等に考察の必然的理由があったからである。

ヴィジュアル映像資料の利用法とその効果については若干の考察を進めたことがある（高津・吉田他：1997）。そこでは、ヴィジュアル映像は、もっぱら講義・解説の理解を助けるための補助手段としての意味合いが強かった。

しかるにここでは、ヴィジュアル映像を材料にして、そこから対象：現代都市の実像と、現代都市問題を積極的に引き出すことを目的としている。そこから、さらに進んで、種々の資料の渉猟への動機になったり、グループワーク、隣人とのディスカッションなどにもってゆければ幸いである。映像を経験することから真摯な自己と仲間と両方向に鋭い発問や、問いかけが始まるわけである。まさしく問いかけが始まれば、しめたものである。

1.2.「阪神淡路大震災」について

1995年1月17日午前5時46分マグニチュード

M_s = 7.2、震源地淡路島、震源深度16kmの地震が兵庫県で起きた。強い振動約15秒間。地震の発生は多くの記録にあるとおり、95年の正月松の内もあけて間もない頃であり、屠蘇気分もようやく開けるかあけないかの時期であった。「未明の神戸・阪神間を空前の大地震が襲った」とあるとおり驚愕もひとしおであったことも事実である。当初は「兵庫県南部地震」と呼ばれた。しかし、諸当局は意識してか、しないでか、できるだけ小規模地震として扱いたかったのか、「阪神大震災」という呼称はなかなか出てこなかった。災害名称として「阪神淡路大震災」と命名されたのは相当遅くなってからであった。

後に「阪神淡路大震災」の映像は、総合講座『現代都市論』¹の、最終講義の「21世紀都市とその住み方」において、「都市災害と都市住民の存在：都市災害発生モデルと明日の都市住民」として実施されたものである²。

初期の震災ニュースの報道は「神戸地震」と表現されていた。したがって得られているビデオ映像³のタイトルは「神戸地震」となっている。震災発生後十分な情報の収集は困難であり、しばらく、被害者の数は2人、5人という一桁での認識であった。しかし、時間を追うに従って、2桁、3桁となり、間もなく4桁にとどいてしまったのである。

1年後の1996年1月17日、新聞報道では6345人（警察庁発表の震災死者数に、自治体発表の震災関連死800人を加えた数字）。犠牲者の最大の地区は東灘区であり1300人を超えるといわれた（神戸地震研究所1998年4月8日）。1年半後の1996年7月17日では6308人（B新聞による自治省消防庁の発表）。1977年ではついに6430人（1997年12月24日現在消防庁集計）に修正された。負傷者4万3773人、全壊住家10万4900棟、全半壊51万2846棟となった。

2000年1月11日の自治省消防庁調べでは、2人増えて、6432人に修正された。今も地震被害は終わっていないと言われるゆえんである。関連死は910人となっている。知られる学生の被害者には、

神戸大学生 39 人、甲南大学生 16 人、関西学院大学生 15 人の尊い命も含まれていた⁴。

なお、震災関連死と言うのは、以下の概念で使われています。「神戸市、兵庫県等の自治体が、遺族へ災害弔慰金を支給するにあたって調査をし直し、新たに『遺族への弔慰金支給が認められた犠牲者の数』を、公的に残る記録として集計した数字が…震災関連死（者数）と呼ばれている。遺族から弔慰金支給の申請があったケースについて、医師や弁護士からなる『災害弔慰金給付審査委員会』というのが調査した」数である。

この震災関連死者の例としては、95 年 7 月 14 日時点では、以下の事例が含まれている。①避難所で発病し死亡した（神戸市だけで？98 人）。②震災による停電、断水で病院の診療機能が低下したため病状が悪化。③近くの病院が被災し、なかなか治療を受けることができなかった。④診療活動に奔走し過労で死亡した（医師）。震災当日に発病し 5 月中旬に亡くなった。

後には、⑤神戸市の 4 人をはじめとする数名の自殺者も関連死として認められたとのこと。それらには、地震で家族が死亡したり家屋に被害を受け、心的外傷後ストレス障害（PTSD）によるうつ病になって自殺したケース等が含まれるとあります」（以上「神戸地震研究所」web 参照）。

震災関連死の該当要件自体に痛々しいものがある。この点についても、さらに発生原因や震災後の仮設住宅や居住環境の信じられないほどの劣悪さの研究も残された課題である。

1.3. ノースリッジ地震との比較：

ノースリッジ（NR）地震は阪神大震災の奇しくも 1 年前であった。1994 年 1 月 17 日の 4 時 31 分、被災地は、ロサンゼルス（LA）市を中心とした。規模はマグニチュード $M_s = 6.8$ 、震源はロサンゼルス市の中心部から北西約 40 キロほどのサンフェルナンド峡谷（San Fernand Valley）の中央部 LA の郊外部にあたる⁵。震度 18 キロ。死者 57 人、負傷者 8716 人、避難所生活者は、LA：最大 2.2 万人

であった。（阪神：最大 34 万人）。建物倒壊数は、：NR；11 万 2065 棟（阪神；倒壊 10 万 209 棟、全壊 10 万 7074 棟、計 20 万棟以上）。被害総額は、：NR；2 兆円（阪神；9 兆 9156 億円：1995 年 3 月県推計）である。

林・長能の計算によって比較すると、阪神大震災の建物倒壊件数は NR 地震の 2 倍に過ぎないのに、人的被害では 90 倍（ただし報告書は阪神大震災の死者を 5502 名で計算している）、避難所生活を強いられた人は同 15 倍、物的被害なら同 4～5 倍としている。そして彼らは、「災害発生を予防することは、防災の重要な使命だが、発生した被害の拡大連鎖を阻止し、被害を最小限度に限定化することも防災の重要な使命である」としている。

佐藤武夫の災害発生モデル、そしてわれわれの「都市災害発生モデル」と同様結論を導く。「この点で十分な備えがなされていなかったことが阪神大震災の貴重な教訓の一つである⁶」としている。

表・久保寺（1998）などにみるとおり、米国では、不確かで、予算ばかりを無駄に消費する地震予知技術の開発などから、起きた地震へのすばやい科学的対応と人命救助と財産保全の最優先対応に、地震対策を 180 度、早くから転換していたことである。まさしく合理的でシステムティックな科学的対応を好むアメリカ的政治社会文化構造を見せつけてくれた。

徹底したシステム分析と、長年のシステムの対応を得意とする米国的な政策と予算配分の転換であった。前著（140 頁）では「…緊急危機管理体制が確立されていたのである。…地震発生から時を移さずにホワイトハウスから各地域の自治体に向けて危機管理体制が敷かれ、災害応急体制や復旧復興体制につないでいく大事業をやったのけた」ことを認めている。

「日本の調査団のいずれの報告をみても、こうした体制を今すぐ日本に輸入できると考える方はいないようである。しかし、ノースリッジ地震の 1 年後に日本で生じた阪神淡路大地震において、最も大きな欠陥がこの点に生じていたことを思うと、反省すべき点が多い」とすなおに記されている。

1998 年段階であるから、震災後丸々 3 年のことである。両氏は「…残念ながら、日本ではこの分野にはほとんど手がつけられておらず、もっとも取り組みが遅れている分野となっている」と信じられないことをそのまま真摯に報告されている。交通施設や建築物、ライフラインの被害と対策を都市構造や土地の余裕や直下型地震という非可避的地震特性要因に帰せられているのは、専門畑によるところであり、分析目的の相違によるところであろう。

また別の誠実な実証研究報告書を提供した立命館大学震災復興研究プロジェクト（以後立命館大プロジェクトと略記させていただく）も重要な指摘をしている。「この点で十分な備えがなされていなかったことが阪神大震災の貴重な教訓の一つである⁷⁾」としている。とくに、社会科学と災害研究という点では、「現在の予知技術が到底実用レベルにないことが明らかにな」っている。

さらに、「地震は地震学者に任せておけばよい」などとはまったく言えない現状であることは明瞭である⁸⁾。何故なら「自然現象としての地震が災害となるのは、そこに人間が住み社会生活をまさに営んでいるからである」。

「社会現象としての災害は社会現象を研究する社会科学によって研究され、政策が講じられねばならない」とする先の立命館大プロジェクトの提言どおり、「災害発生メカニズム」の社会科学からのアプローチの必然性は佐藤モデル以来常識である。

次章の中間的まとめはヴィジュアルデータおよび各新聞マスコミからのおおよその整理であるが、立命館大プロジェクトに優れたデータの提供がある。

1.4. 中間的まとめ

講義にあたっては、当時の新聞報道、および各社の TV 解説および各種専門家の分析などにあげられた震災拡大の要素の中から、特に心を引かれた話題を挙げて、講義のまとめとして、今後の課

題を以下のように提示した。

- * 危機管理体制：cf. 米国ロスアンゼルス・ノースリッジ地震
- * 初動体制の遅れ：政府の対応、危機管理本部の設立時期
- * 国際性：外国政府の協力申請への対応、
eg. スイス・欧州の盲導犬導入
- * 情報システム：非対称性・非近代性、専門家充足、シミュレーション必須
- * 情報不足と偏歪性：マスコミの日常的商業性＝alternative 不足
- * マスコミの重要性（道路・鉄道・空港施設中心、空撮偏向、片方向、地上撮影の不足、→市民・生命中心＝市民的行動）
- * 警察の機動力の重要性：システムと近代性＋量的不足
- * ヘリコプターの功罪（空撮の能力限界、騒音、取材ヘリの問題、関心の逸失）
- * 自衛隊の社会性：市民・地方行政との関係：未連携・未理解
- * 地震学の現代性と政治性：予算配分・建築技術

阪神大震災以来、初動体制の遅れについては、国際的な指摘と批判にさらされて、情報システムづくりが真剣に進められたはずであった。しかし、ごく近年の朝日新聞他のマスコミの指摘によれば、「阪神大震災の教訓は今回も十分には生かされなかったようだ」⁹⁾と決めつけられている。『お粗末な初動遅れ』との見出しのもとで「首相はゴルフ、官房長官は地元入り」と題して、初動体制の遅れが指摘された。

近年 N 県や K 県などで続続と表面化された不祥事をはじめとする日本の警察行政など、一般的公共組織における初動体制の遅れは、関係者や仲間内のかばいあいによる意図的なものであるとみられてきた。しかし、現代日本文化におけるシステム化への本質的な不適合性か、特殊な政治的風土性における拒否構造が存在するとしたら、問題は深刻なものとならざるを得ない。

というのは阪神大震災では情報不足、情報シス

テムの未確立の問題が明らかに存在したことが認められている。今回は新聞見出しのタイトルしており、首相のゴルフ、官房長官の地元入りということである。もし、システムさえ確立していたら、十分に対応できた内容であったからである。

21 世紀、わが国も IT 革命元年として、国を挙げて多額の財政投資を進めると宣言されたばかりである。情報システム化は民間技術と創造性によって飛躍的に発展している。しかも中央政府筋からでも、IT 関連技術の専門家各 1 万人をインド・中国などからお招きする意向ももらされている。かかる時代に初動体制と有効な情報システムの確立は、国民にとっては切っても切れない重要な要件である。

阪神大震災及びその後の諸災害、諸事件から得られる教訓からは、災害発生の佐藤モデルが有効となろう。市民・国民の責任に加えて、システム思考と政治的風土性の問題も加えられなければならないだろう。

1.5. 神戸地震のvideo: 地震発生からvisual映像

「N 局大阪 K 報告」

〔8:18〕画面は、阪神高速道路沿いを空撮。バスの宙ぶらりんや三宮駅で警官被害者の比較的落ち着いた報道。高速道路の被害にのみ注目。ヘリコプターに対する問いかけ、「人影は見えないですね」、「ええ見えません」、「関西国際空港、大阪空港・・・」 「所々に煙が上がっています」、「阪神高速道路で 2 人のなくなった男性あり、多数のけが人」、「淡路島でも、震度 6 の地震がありました」。「多数の人が下敷きになっている模様」。

〔8:26〕「2 階 3 階が崩れて 10 人が生き埋め。9 人が生き埋め、救出してほしい。という報告があります。」

〔8:30〕火災の発生、赤い炎あり、しかし、「阪神電車が横転しています」と電車で気をとられているようす。

〔8:32〕ようやく K レポーターは「いたるところで火災が発生しています」。

〔8:33〕「火災が発生し燃え尽きています」、ヘリコプターからの観察の限界が読みとれる。ニュースキャスターは「『K レポーターはいたるところで火災発生』と報告していますが、私の確認できるところでは住吉地区など 3 箇所では火災発生が見られます。芦屋で一人の方がなくなっています。」このころから、空中からでなく地上からの崩壊家屋の撮影が多く撮映される。

〔8:39〕「けがをした高齢婦人が三の宮駅の駅前に毛布に包まっております」。しかしまた、関西国際空港に注意が集まっている。「5 人の方がなくなったという情報があります。生き埋めになっている人が多い」。

〔8:47〕兵庫県警のまとめで、現在 5 人の死者のみ確認。「NHK 大阪、NHK 職員がアパートの戸が開かなくて困ったが、同じアパートで周囲の家から『助けてください』という声が聞こえた」という。

〔8:50〕K 報告は、「建物のやねが赤茶けて見えます。かわらが落ちているのでしょうか」。「今何箇所でも火災が発生していますか」、「3 箇所です」。このころはまだ、火災や崩れた建物の下敷きになったひとびとの存在は、ほとんど気づかれていないのだろう。地上での情報収集や、生き埋めや崩壊家屋への心配には至っていないのであろう。このあたりが、震災に対する未熟な日本の報道の姿勢であったのであろうか。しかし、すかさず重要な配慮も始まっている。「消火活動は行われているのでしょうか」、「火の手がおさまって来るといふ形跡はありませんか」との心配の声が入る。「脱線した阪神電鉄の南の地区が火災」との説明が入っている。

〔8:57〕まだ高速道路と道路上の車の報道がなされている。K 氏とキャスターの関心は市民の安否に至っているのであろうが、空からは、その意図は伝わらず、なかなかそのような映像がつかめないであろうか。車の映像ばかりが続いている。「車に乗っていた 2 人の方がけがをしている」。

以上ができるだけ忠実に大地震の真実を報道しようと懸命に努力する誠実なキャスターと K リポ

ーターの真剣な報道のおおよその画像である。ここから読み取れる限りの内容である。確かに徐々に被害が拡大していることが実感できる。

1.6. 災害の知覚・行動とのかかわりあい:

災害の知覚・行動とのかかわりあいについては、適当な見解が得られる。それは、ダイアナ・R・リバーマン&ダグラス・J・シャーマンによる「小説・映画のなかの自然災害」¹⁰ in J. Burgess & J. Gold (1992)『メディア空間文化論』95-106 頁である。映画や小説を直接の対象にしている。しかし、もちろんメディアとして共通する点がある。以下にポイントだけを引用し、紹介させていただこう。

- ①「災害映画や小説は自然災害についてかなりの情報を提供するが、その正確さにはバラツキがあるのは明らかである」。
- ②「科学的助言者への謝辞が、物理的現象の描写の正確さに対する一定の関心を示すものではあっても、スペクタクルの演出や読者の興奮のために気を配るほどには、作家や監督は描写の正確さに注意を向けていないのではなかろうか」。
- ③「おそらく作家や脚本家は自然災害に社会がどう対応するかについての研究成果には、容易に近づけないのであろう」。
- ④「そしてまた、自然現象それに対する社会の反応の複雑さには、広範な視聴者・読者を持ったマスメディアにはおそらく不向きなのであろう」。
- ⑤「映画や小説の不正確な情報が「実際の」緊急時に際して問題になる」。
- ⑥「このことを立証するには、災害についての情報と災害への対応とを結びつける研究が明らかに不足している」。

リバーマンとシャーマンによる指摘¹¹は、メディアのあり方に示唆深いものがある。メディアにも視聴者への過剰な迎合やサービスがないとはいにくいからである。

この点については、別の視角からの主張もある。「しりとりゲームで間違えた出演者が袋叩きされ

るもの、…ネブチューンというタレントが女性を巴投げして、スカートの中が見え隠れする…」番組が、ある委員会で問題にされたことに加えて、もう一つのポイントを指摘している。それは「…人間を『もの』、機械として扱い、人間の尊厳を軽視し、そのように扱われる人間の気持ちを思いやることを無視する精神態度・心理的態度を助長することである」¹²とする点である。

問題提起は「17 歳少年による新宿爆弾投げ込み事件による、…『人を壊してみたかった』問題と共通するところから指摘されている。なくなった番組ではあったが「風雲たけし城」とも共通する¹³。番組製作者へのいっそうの節度の期待に加えて、市民の意識向上と市民による文化形成の責任こそが問いかけているように受け取ることができた。

リバーマンとシャーマンの指摘の④については、けっして、単に作家や脚本家のみならず、多くの専門家が同様条件に制約 (constraint) をうけているのではないだろうか。ニュースの取材記者や報道者においても、つうじょう、火急の場合にはその制約から免れ得ないのではなかろうか。とすれば、ここにこそ、日常的に、充分研究・検討された、メディア情報管理システム上にセイフティ・ネットシステムを構築することが要請されているであろう。

1.7. 結: 現代都市論におけるビジュアル映像使用からの考察とインプリケーション

都市における市民の存在について、映像の観察者は大変なショックを受けながら、さまざまな実情を知ることができた。8 時 18 分から 8 時 57 分の 39 分間の映像から、自分自身によるイメージを形成することができたはずである。解釈は自由であるが、ほぼ上記の新聞・雑誌・TV からの問題指摘も理解できたことであろう。かなりの興奮状態を知ることができた。

佐藤モデル¹⁴は、「災害」: 水害の発生要因を以下のように 3 つの要因に分けた。①「素因」: 豪

雨、②「必須要因」：土地造成；河川の短水路化；コンクリート化、③「拡大要因」：低所得者住宅；旧河川敷の3要因である。

ここで、我々も「震災」発生の要因を三つに分けてみよう。「地震」は①素因にあたる。「老朽家屋」；「旧式都市計画」；「ガス管」；「消火施設」；「道路封鎖」等は②必須要因にあたろう。「情報システム」；「初動システム」；「危機管理システム」；「国際連携システム」；「ライフラインシステム」などに制約を受けている都市住民の居住状態が、③拡大要因となろう。くわえて、広い意味で、未整備で貧弱なメディアシステムも都市住民の被災と結びつくことから、検討の余地はあるのかもしれないが、③拡大要因に分類されてよいのではないか。

この過程で生まれてくる災害の主体である被害者は一般市民である。情報のあり方によっては、高速自動車道路、鉄道、空港、港湾など都市施設は存在しても、我々自身、都市住民の存在はどこかへ消えてしまわないとも限らないからである。

われわれ市民・住民自身が都市の主体であるはずである。都市住民自体がこのような災害発生の全過程を教訓として学ぶには、神戸市の「阪神淡路大震災復興支援館：フェニックスプラザ」のとき市民の会合の場は最も優れたものであろう。かかる施設を公開している神戸市あるいは兵庫県は新しい都市経営のパイオニアの一つであろう。

ボランティア運動と、コミュニティづくり運動など、NGO、NPO などインフォーマルグループの形成が何にもまして重要である。またこれには地方自治体、国の支援が必須であろう。したがって、インフォーマルグループの形成に加えて、情報システムの豊富化とメディアと市民がネットする新しい危機管理システムの構築は、日常の生活社会の中から欠くべからざる要素である。

さらに、危機管理のための情報システムの構築は、IT 革命の中でいっそう重要な要素になることであろう。この点からも、ビジュアル映像教育の持つ意義は、教育効果のみに留まらないで、危機発生の構造分析と、組織的な創造性開発との三重

の効果をもつものと考えられる。ビジュアル映像のビデオ・アーカイブ整備と設立は機を得た構想にほかならない。それ以上にその使用法とりわけ「市民＝ボランティアグループ」と「メディア」と「教育」の連携は、もっともっと研究され続けられなければならないであろう。

その後 1999 年夏、京都市内、同志社大学で開かれた日本経営学会の終了後の 9 月 12 日、神戸市中央区下山手通 5-10-1 の「阪神淡路大震災復興支援館：フェニックスプラザ」を訪れることができた。活発な被災者支援団体のボランティア活動や活発な多数のミニコミ紙の発行、コミュニティづくりの計画案の紹介などを見ることができた。まことに新鮮な驚きであった。

ここで、不十分ではあるが、以下のような成果と残された課題をまとめてみる。経験からの貴重な成果には、まずもって、①ボランティア活動の活発化（個人・自立市民の力）、②コミュニティの見直し（市民の自覚・協力）、③市民自身による都市計画・建築研究への参加の活発化、④政府・警察・自衛隊の研究活発化と整備の進展、⑤GIS の日本地理学会における取り組みである。

基礎的・抜本的課題には、①コミュニティ再生・整備運動、②GIS (geographical information system) の整備、③科学＝文化（応用科学偏重→基礎科学重視）、④生命哲学・生命教育問題、⑤都市計画（画一性と官僚制）の社会科学への開放、⑥真の国際性・文化共有性（日本人優越説・偏狭性の克服）⑦「市民」・「メディア」・「コミュニティ」・「ボランティアグループ」・「教育」の親密な、あるいは緊張した連携などがあげられるのではないであろうか。

後注

1. 総合講座『現代都市論』では、「都市化、都市生活、都市の国際化、都市の発生と南米都市、都市社会と大衆、市民の自由と自治、都市経済と地価・土地利用、都市財政、都市景観と都市美、環境整備と都市計画、都市づくりの仕組みと法、都市の社会病理と逸脱行動、都市社会と

インフォーマライゼーション、21世紀都市とその住み方」なる一連の講義がオムニバスで説かれた。そして現代都市論の講義のねらいは、現代都市の構造と問題点の発見、現代都市の形成と都市住民の生活実態の解明、都市住民の都市づくりへの参加の仕方、都市の主体発見と都市住民の存在の確認にあった。

2. ビデオは1月17日～18日のNHKなどの貴重な映像記録4巻である。その後の長期にわたる系統的な映像は豊栄市誌編集委員のお仲間であった南憲一先生のご好意によるものである。暖かいご配慮と絶大なご協力に感謝いたします。
3. 講義の開始にあたっては、震災によって失命された方がたのご冥福を祈って1分間の黙祷がささげられた。
4. 関西学生報道連盟「阪神大震災から3年1998.1.16」より
5. 林春夫（京都大学防災研究所）・長能正武（竹中工務店）「1994年ノースリッジ地震災害調査報告」。
6. 林春夫（京都大学防災研究所）・長能正武（竹中工務店）「1994年ノースリッジ地震災害調査報告」。
7. 立命館大学研究プロジェクト編（1998）90-91頁参照。
8. 同上7．90-91頁。
9. 朝日新聞、2001年2月11日「米原潜の衝突による水産練習船の沈没」の関連記事である。
10. J. Burgess & J. Gold(1992)『メディア空間文化論』95-106頁。
11. 同上10の95-106頁
12. 萩野弘己（2001）「論壇：人を『壊す』テレビ番組に異議」朝日新聞2月6日、あたりまえの指摘ではあっても、この国では、なかなか市民権が得られない文化である。この種の番組は限られてはいないであろうが、この過程で知らず知らずのうちに「命や生活」と「娯楽や息抜き」の本末転倒がひそかに進んでしまっているのが現代ではないのだろうか。
13. 阪神大震災で問われた問題のうち、報道のあり

方は、最も大きなものの一つであった。それは報道に関するシンポジウムさえ開かれたことに如実に語られている。野尻（1996）は次のように訴えている。「…この新潟市民唯一の犠牲者の住んでいた住居に、連日のようにしつこく、新潟の新聞社とテレビ局が押しかけ、ご遺族の感情を逆なでし、周辺住民からひんしゅくを買ったという…」この問題はいわゆる「被災者救出と撮影・報道者の立場」の問題や「被害者とマスコミとの関係」という長年にわたる最大の問題である。若干の方向性はバージェスとゴールド（1992）の中に示唆されていると言える。

14. 佐藤武夫（1962）による。また西山卯三（1973）は「素因」（自然的・社会的）＋「必須要因」{(社会的)→災害}＋「拡大要因」{(自然的・社会的)→大災害}と図式化している。

なお、都市の災害論概念について、さらに、佐藤モデルについては、佐藤武夫門下生の角南泉教授に多大な啓示をいただいていた。またこのたびは佐藤武夫著書の恵贈に預かった。記して感謝の意とします。

参考映像

- 〔地震ニュース：NHK：平成7年1月17日：8：18～9：57〕
- 〔神戸地震：平成7年1月17日、8：00～11：00；TV21特集〕
- 〔神戸地震：平成7年1月18日、早朝；神戸地震全部〕
- 〔神戸地震：平成7年2月17日、7：00～8：50；BSN特集木村キャスター、松平キャスター、BSN〕
- 〔NHK神戸地震災害特集：平成7年2月18日4:45～6：00；NHK〕
- 〔神戸地震合同慰霊祭平成7年3月5日2：00～2:45〕
- 〔神戸地震：TV21神戸地震特集；平成7年3月8日〕

参考文献

- 稲見悦治 (1964)『都市災害論序説』古今書院、216 頁。
- 斧谷弥守一 (1997)『『地震』という概念の異変』、『阪神大震災・心の風景』,175 頁。
- 表俊一郎・久保寺章 (1998)『都市直下地震』古今書院、209 頁。
- 河田恵昭 (1997)「阪神淡路大震災の教訓の総合化」、『都市問題研究』49-1,14-32。
- 佐藤武夫 (1962)『災害論』劉草書房、
- 佐藤・高橋・奥田編著 (1964)『災害論』劉草書房、349 頁。
- 鈴木浩三 (1997)『震災復興の経済学』古今書院、206 頁。
- 住友・平山 (1997)「阪神淡路大震災におけるボランティア活動のシュミレーション分析」『都市問題研究』49-1、99-117。
- 高津斌彰・吉田和比古 (1997)「オムニバス形式での総合講座『現代都市論』の教育効果をあげる工夫」、新潟大学教育開発研究センター『大学教育研究年報』No 3、133 - 144。
- 「特集：都市と防災ー阪神淡路大震災の教訓から」、『都市問題研究』(1995)、47-7。
- 小林一樹 (1995)「都市防災から地震災害の軽減を考える」、『地理』40-4、33-43。
- 西山卯三 (1973)『地域空間論』劉草書房、710 頁。
- 野尻 亘 (1996)「阪神淡路大震災見聞備忘録」、『新潟経済地理学会年報』9 号、6-10 頁。
- 被災者復興支援会議 (1998)『復興かわらばん』21 号、6-7。
- 廣井 脩 (1997)「防災情報システムはどう改善されたか」、『都市問題研究』49-1、45-58。
- 横田尚俊 (1996)「阪神・淡路大震災と都市コミュニティ」日本都市学会『日本都市学会年報 1995』29 巻、78-83。
- 立命館大学震災復興研究プロジェクト編 (1998)『震災復興の政策科学』有斐閣、352 頁。
- J. Burgess & J. Gold 著 竹内啓一監訳 (1992)『メディア空間文化論』古今書院、329 頁。

2 「現代都市論」のためのビデオ・アーカイブ 〔吉田和比古〕

総合科目『現代都市論』において、筆者は主として「歴史的景観の保全／都市の景観美の構成」といったテーマを扱ってきたのであるが、過去の授業においてはかなり実験的に映像資料を駆使してきた。将来は公共メディアにより従来放送された番組や、各地のデジタル・アーカイブの充実や各地の博物館・美術館の収蔵品を紹介するためのインターネットを使用した「デジタル・アーカイブ」の充実などと汎用化が予想され、大学教育の中でもそれらのマルチメディア情報の積極的活用が必然的な授業形態となることが容易に予想される。しかしながら公共放送の番組に関して言えば、現在においてさえ一度放映された番組は、テレビ局自体が外部に貸し出すシステムがなく「一度逃した映像情報」へのアクセスについては、当面は個人がビデオで録画した資料が「一次映像資料」としてその重要性を持つであろう。そして個人が収集した映像資料は、理想的に言えば一つのネットワークを形成し相互に利用し合う形が望ましいと思われるが、そこには未だ流動的な著作権制度との関連で、今後どの程度公開する形で利用しあえるものかどうか未知数である。ただ文献学的には、特定のテーマに関した文献を列挙しそれを解題し、それを言語情報として発表するという作業も一定の評価を持つものであると同様に、いわばそれをなぞらえた形での映像資料の解題作業は、その時代の社会文化現象に関する関心のありようを知る上ではそれなりに貴重な記録作業となるはずである。以下で、先述のように「景観論」に関するデータを主に紹介されているが、それを俯瞰することにより、時代のトピックを覗き見る思いがして筆者自身その記録内容に客観的視点からも大変興味深いものを覚える。また映像資料の学習教材としての使用は、ただ単に言語的説明の不可能な部分を映像情報で補完するだけでなく、メディア情報を批判的に読み解いていくという「メディアリテラシー」を訓練する機会として、積極的

な活用が期待される。

(1)歴史景観・都市景観に関するビデオ・アーカイブ

近年海外旅行が盛んとなり、ヨーロッパの美しい町並みを直接見聞する日本人が増えたこともあり、次第に町並みや景観に対する美意識が高まってきた。およそ 5-600 の自治体では美しい町づくり・村づくりのための「景観条例」を制定するようになった。このことは歴史的景観の復元がたんに経済的余裕や古きものへのノスタルジア(郷愁)だけが動機ではないことを示している。「東京都景観条例」では「景観域」と「景観基本軸」という二つのコンセプトを立てている。前者は山の手・川の手・お台場と言ったウォーターフロントなどのゾーン景観—いわば絵の額縁の設定である。さらに世田谷区における「風景づくり条例」の設定は大変ユニークな試みである。「景観/風景/景色」などと使い分けられる単語は英語で言うと、

land :土地(地域らしさ) + scape: 全体・総合(全体のバランス)の合成語と対応する。従来の都市計画の縦割り行政の弊害を克服する試みとして全体のバランスをとる景観行政がこれから必要となろう。ただし、基本術語としての「景観」は客観的・科学的な〔視覚に映る範囲のもの〕として規定できるのに対し「風景」は主観的・文学的として〔個人的な記憶・思い出〕ともかかわりを持つものとして、その概念を明確に区別すべきであろう。例えば「原風景・心象風景」は視覚的な「景観」に心が加味された個人的体験としての脳内イメージを形成している。また従来の景観行政は規制的性格が強かったのに対し、これからは景観とならんで風景に係わる心のありようが重視されねばならない。その意味で、都市景観は必ずしもバロック的な数学的・幾何学的な整合性が美意識の必須要素ではないはずである。規制型から市民のライフスタイルを含めた参加型の景観行政がこれから必要となるという視点は、学生への動機づけとして恰好の問題提起となると同時に、I C

OMOS の 72 年宣言にうたわれた「歴史的環境は人間環境の基本要素である」という意味がまさに今大事な時代となってきたと言えよう。

1「景観から風景へ」〔『視点論点』解説：進士五十八 1999 年 5 月 10 日・E T V・10 分〕

2「岐路に立つ現代建築 第7回(終)破壊と再生」〔7 回シリーズ・1988 年 B B C 製作・放送日時不詳・E T V・45 分〕世界の建築界の流れを検討し、優れた新進若手建築家の作品を紹介するシリーズ。世界中で人々は古いものを破壊する傾向と闘っている。そうした成果として、鉄道の駅は美術館や博物館に、工場はコンサートホールにと、各地で古い建物が新しい生命を得ている。フランクフルトの歴史的な中心街の再建。パリの新しいオルセー美術館、アメリカによみがえったショッピングモールの事例が紹介される。

3「歴史都市の未来像をさぐる」〔『テレビ・シンポジウム』 1988 年 11 月日付不詳・E T V・45 分〕1988 年世界 24 カ国、25 都市の代表者が参加して、京都で世界歴史都市会議が開かれた。「歴史的遺産の保存と都市の発展・活性化をどう両立させるか」というテーマを掲げ、11 月 21 日「恒久の平和を願いつつ世界人類とともに歩む」との京都宣言を採択した。会議では「都市計画論・文化遺産論・都市産業論その他」の 3 テーマで意見交換。直接解決の糸口になる妙案こそ出なかったが、この会議を一過性のお祭りにせず、翌年フィレンツェで第 2 回会議を開くことで合意、息長く問題解決に取り組むことを決めた。「伝統と創生」をテーマに急激に進む都市化の中で、世界の各都市は歴史的遺産をどう守り、一方で将来に向けて創造力あふれる都市を維持するため、何をすべきなどが論議された。番組では会議をふまえ、歴史都市の未来像について識者が語り合う。

4「奈良の都～平城京発掘」〔『歴史でみる日本』1999 年 5 月 11 日・E T V・30 分〕奈良の都、平城京の西より北端にあった平城宮は、天皇の住まいと役所として、現在の東京でいえば宮城と霞が関の省庁に相当した。近年発掘調査が進み、建物跡や、墨筆で文字を書いた板(木簡)をはじめとする豊

富な資料から、従来の文献史料ではわからなかったことが明らかになっている。この番組では平城宮跡の「復元建物」や出土品などを見ながら奈良時代をいくつもの視点から考える。とりわけ、かつての首都機能を有した平城京を都市景観と機能の視点から見直す良い視覚教材となっている。(→関連映像資料：5,6)

5「復元された朱雀門」〔『昼どき日本列島』1998年3月6日・NHK・25分〕

6「古代日本・都の建設ラッシュ」〔『堂々日本史』1996年放映年月日・不詳・NHK・45分〕

7「奈良と世界遺産」〔『あすを読む』毛利和雄 1998年12月2日・NHK・10分〕古都奈良の文化遺産がユネスコの世界遺産に登録されることが決定した。これには寺院や神社および平城京など8つの文化財から構成されている。この解説番組では、文化財を如何に保存していくかということと同時に、文化財を生かした将来の「町づくり」について提言が行われている。とりわけ平城宮跡は市街地の一部を形成しているための発掘・整備・復元は市街地の再開発〔ソーニング〕問題と密接にかかわっている。

8「歴史遺産をどう活かすか～平城京シンポジウムから～」〔『金曜フォーラム』1998年12月12日・ETV・75分〕1998年4月に古都奈良に「朱雀門」が復元され、同年11月1日には大阪国際交流センターにおいて、平城京を蘇らせる意義や現代の都市づくりの中での歴史的遺産の位置づけなどを話し合う「平城京シンポジウム～遷都1300年に向けて～」が開催された。平城京が現代に何を伝えるかという主題に関して、平城京に関しての最新の研究成果を振り返るとともに、古都奈良の歴史遺産をいかに生かしていけるのかという可能性について討論される。

9「よみがえる飛鳥の都～発掘された亀形石造物」〔『報道特集』1999年9月12日・BSN・50分〕

10「唐招提寺～蘇れ！天平の甍・平成大改修」〔『クローズアップ現代』2000年3月16日・NHK・30分〕天平時代に中国から渡来した高僧鑑真和尚が開いた国宝・金堂の柱が「倒れ込み」で傾くとい

う異変が起きて上部の木組みが歪んでしまった。歴史的建築物はそれを構成する部品の一つ一つが貴重な文化財である。「奈良県保存文化財事務所」は、建設会社・設計事務所と協力して修復にとりかかることになった。番組では、CGを駆使した修復のための最新の工学技術が詳細に紹介されている。

11「よみがえる平安京～荒俣宏が探る1200年の謎」〔1994年放映月日不詳・NHK・50分〕伝統文化の蓄積された京都がなぜ1200年の長い間「都市」として生き長らえたのかという、古都における歴史の地層を読みとく試みで、歴史的景観の保護は、そこに深く根づいている伝統文化と密接不可分なものであることを示唆している。とりわけ平安京という建設のマスター・プランが単に「都市としての集住機能性」を目的としたのではなく、一見して呪術的とはいえ、中国の「四神相応」という風水哲学の理念と深くかかわっていることがCGによって詳細に解説されている。

(→関連映像資料：12)

12「景観から歴史を読む③平安京計画と四神の配置」〔『NHK人間大学』1997年7月24日・ETV・30分〕

13「幻の中世都市～青森・十三湊(とさみなと)遺跡」〔『遺跡発古代ロマン』1999年7月20日・NHK/BS1・60分〕およそ600年前、中世日本海文化の拠点的な港湾都市として栄えた十三湊は歴史から忽然と消滅したが、鎌倉から室町にかけて環日本海貿易にも取り組んだ安藤氏の拠点としての中世都市の全貌を復元する為に、古地図・地籍などと照合しながら進める発掘の様子を伝える。

14「鬼(き)ノ城発掘～古代王国の謎」〔NHKスペシャル・1998年2月11日・NHK・50分〕岡山県の総社市周辺は、桃太郎伝説で知られる古代・吉備の国の中心とされている。同市を見下ろす標高約400メートルの高台にある山城跡・鬼ノ城で大々的な発掘が行われた時の模様を伝えるドキュメンタリー。多数の製鉄炉の発掘などから、日本の古代都市は周辺部に構築された朝鮮式山城とのいわば複合建築群(Baukomplex)として捉える一つの具

体例を示している。

15「草戸千軒町遺跡～中世の湊町」〔『歴史でみる日本』 2000年7月25日・E T V・30分〕

16「木の国の文化遺産～世界遺産になる法隆寺・姫路城」〔E T V特集 1993年12月1日・E T V・45分〕1993年にユネスコの世界遺産条約に批准、翌年に「法隆寺・姫路城・白神山地・屋久島」が世界遺産として認定される。この4つに共通するキーワードは言うまでもなく「木」である。国内で指定されている重要文化財約3500の中で90%以上は木造建築物である。法隆寺は高温多湿の気候や火災の危険、地震・台風の多発地域という風土の中で現在に残る世界最古の木造建築として評価されている。近世城郭で現存する天守閣はわずか12であるが、そのうちで姫路城は建築技術および美学的見地から最高峰に位置している。番組では、歴史的景観を形成する木造建築物の文化的価値とその保存の問題について議論される。

17「木の国日本の世界遺産」〔市販ビデオ・NHK出版〕・文化遺産編 ①法隆寺②姫路城・自然遺産編 ①白神山地 ②屋久島・文化遺産編 白川郷・五箇山・厳島神社・原爆ドーム。

18「姫路城～武人の造形」〔レーザーディスク NHK出版 1994年〕

19「白き要塞の美～姫路城」〔『国宝探訪』2000年4月1日・E T V・30分〕白鷺城と呼ばれる国宝姫路城は、関が原の戦いの直後、1601年に築城開始、わずか8年で完成した。攻め手の攻撃を阻むための石落とし、武者隠しなど機能性が高い反面、城の形は美しく、まさに城の中の城と言われている。番組では、戦のための様々な知恵が生きている白鷺城の機能性について解説するとともに、白壁やフォルムの美しさを紹介していく。ゲストは昭和31年(1956)からの「昭和の大修理」に参加し、40年もの間姫路城保存に携わってきた元文部技官、西村吉一氏である。

20「日本の原風景をどう守るか～岐阜県白川郷合掌作りの集落～」〔『金曜フォーラム』1999年8月6日・E T V・70分〕「都市化の波」は肯定的側面と否定的側面を持つ。日本の長い歴史の過程で農

耕産業と一体となって生まれてきた心に刻み込まれた原風景は、地方に波及する開発の波、都市化と平行する過疎化の進行、経済効率優先主義などにより脅威にさらされている。原風景を形成する地方の景観は味気なくなりつつある。いわゆる地方の中核都市の「ミニ東京化」である。日本全土における無秩序・無機質な都市景観は、時代の必然なのか、あるいは原風景はどのように概念規定され、どのように守られるべきなのか―山村の具体例として岐阜県の合掌作りで知られる白川郷、農村の具体例として岩手県の肝沢町の取り組みが紹介される。楽観的なアーバンゼーションに対する異議申し立てとしてこのパネルディスカッションは独創的である。

21「日光再発見～世界遺産・日光～美の景観」

〔2000年5月14日『新日曜美術館』・E T V・45分〕古代以来の日本的宗教空間を継承するものとして高く評価を受け、1999年12月、日光東照宮、日光産輪王寺、日光二荒神社の2社1寺とその周辺地域がユネスコによる世界遺産に登録された。番組では日光の美の景観を巡り、世界遺産となった日本美の極みを堪能する。

23「日光再発見～世界遺産登録記念シンポジウム」

〔『金曜フォーラム』2000年3月17日・E T V・70分〕日光は2社1寺と並んで、建物周辺の山林地域、自然と社殿が一体となった文化的景観も世界遺産の対象となっている。番組では日光の遺産を多角的に探るとともに、次の世代に伝えるべきメッセージを提言する。

24「よみがえる李朝の王宮～復元キョンボックン(景福宮)」〔E T V特集、1999年7月28日・E T V・45分〕韓国で最も長い李王朝の時代、1394年に建設された王宮・景福宮(キョンボックン)は豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に焼失したが、現在その復元が学際的な国家プロジェクトとして進められている。これは韓国の人々が大切にしてきた心と形の現代に蘇らせようという試みである。この景福宮跡地にはかつて日本の帝国主義の支配の象徴でもある「朝鮮総督府」が立っていたが、復元に先立ち1995年に取り壊された事実も大変意味深い。王

宮全体の復元では 60 以上の建物が復元されねばならないので長い時間が必要とされる。この番組では、歴史的建築物の復元が、単に観光産業の目玉と作ることではなく王室文化の復元は、民族の歴史と自尊心（アイデンティティ）の復権でもある点が示唆されている。

25「国宝はいつ蘇るのか～室生寺・五重塔の修復」〔『クローズアップ現代』1998 年 11 月 10 日・NHK・30 分〕98 年 9 月 22 日奈良県を通過した台風 7 号は大木を倒し 1200 年の風雪に耐えてきた「室生寺五重塔」を直撃し大きな被害を与えた。同時にこの台風は関西東海地域の 16 の国宝に被害を与えている。具体的修復計画には多くの困難が伴うと予想され、最悪の場合には全て解体する可能性が示唆されている。石の文化とは違い、木の文化は自然災害の脅威が大きいと言わねばならない。さらに屋根を葺くための「檜皮（ひわだ）」といった建築材料の不足も心配される中、番組では国宝建築物に課せられる様々な条件の克服など、完全修復のための課題を検証する。これは、日本における危機管理のずさんさの一部を形成していることを示唆する。

26「室生寺五重塔はこうしてよみがえった」〔『クローズアップ現代』2000 年 7 月 29 日・NHK・30 分〕台風被害後 2 年で完全修復された経過を検証する。

25. の番組と合わせて鑑賞すると興味が深まろう。

27「世紀を越える大修復・京都西本願寺御影堂」〔2000 年 4 月 29 日・E T V・50 分〕

28「ニッポン近代化遺産への旅」〔第 46 回教育映画祭優秀賞、2000 年 1 月 10 日・E T V・25 分〕江戸時代の寺子屋教育による民衆のリテラシー向上と職人の工芸技術により、明治以降日本はわずか 30 年の間に近代化をなし遂げたといわれる。番組では当時の 3 人の若き技術者を例に全国各地に残る近代化の遺産としての多くの明治初期の歴史的建造物が紹介される。

(2)近世城郭関連ビデオ・アーカイブ

日本の大半の県庁所在地および地方都市の大部

分は、近世の城下町から発展してきた。その意味では「城下町」は日本の都市景観の原風景でもあり小高い丘にそびえ立つ城の天守閣は文字通りランドマークでありえた。有名無名を問わず数多くの地方都市には「城跡」が残されているはずである。したがって「城郭の研究」は歴史的景観・都市景観の問題への導入の糸口として、多くの学生の動機づけに有益であると考えられる。

29「戦国大名朝倉氏～越前一乗谷遺跡～」〔『歴史でみる日本』講師：小和田哲男 1999 年 7 月 27 日・E T V・30 分〕現在の日本で戦国大名の居城や城下町がそのままの形で残っている所は一つもないが、近年、越前〔福井県〕の朝倉氏の城下町一乗谷は発掘調査により、1573 年 8 月に織田信長によって焼き払われた状態のまま姿を現した。400 年の眠りからさめた、朝倉氏の城下町一乗谷の様子を明らかにする。

30「復元安土城・黄金の天守」〔1992 年 7 月 24 日・NHK・45 分〕1992 年にスペインのバルセロナで万国博覧会（EXPO 92）が『発見の時代』というテーマで開催され、日本政府は、1970 年の大阪万博以来 22 年ぶりに公式参加した。日本館には綿密な文献考証を経て織田信長が 1572 年に建設を命じた「安土城天守」の 5 層・6 層部が原寸復元された。この番組は最新の C G を効果的に用いて、復元の指導にあたった内藤昌氏の活動を紹介しながら、一度失われた歴史的建築物の復元には大変地味な文献考証という手続きが不可欠であること、さらに日本の伝統的な木造建築技術は、一夜のうちに完成されたものではなく、たえざる試行錯誤そして「安土城・天守」のように実験的な「経験則の蓄積」でもあることを丁寧に紹介している。

31「よみがえる安土城天守」〔1997 年 12 月 2 日・NHK・45 分〕

32「景観から歴史を読む⑦織田信長の城地選定構想を読む」〔『NHK 人間大学』1997 年 8 月 21 日・E T V・30 分〕

33「彦根城～滋賀県彦根市／エッセー・ロマン歴史街道」〔1999 年 3 月 26 日・NHK／BS2・45 分〕

近世日本の城郭を紹介するテレビ番組は数多くあ

るが、本番組は歴史学者小和田哲男氏の時代考証の学識に支えられて、いたずらに趣味に走らない解説により、歴史風景としての「城跡探索」の仕方の良い手がかりを提供している。なお、彦根城においては 本丸御殿の外観を正確に「復元」し、平山城の最高地点に現存する三重天守と合わせて立体的な歴史景観の復元にも成功。さらに御殿内部は「歴史博物館」として利用するという画期的な試みは注目されてよい。

34「夢の都を作れ！豊臣秀吉の大坂建設」〔『ときめき歴史館』 1999 年 3 月 26 日・NHK・45 分〕現在の大阪は人口 250 万人の日本第二の都市である。400 年前に豊臣秀吉が政治経済の中心として建設した大坂（おおさか）の町は、大坂の陣において家康の徹底した焦土戦術により消滅する。近年、発掘調査の進展とともに秀吉当時大坂という「都市建設」のグランド・プランが明らかになりつつある。四天王寺以外は、森と平地のみだった広大な地域が都市化された結果を示す番組のために作られた「復元模型」は出色の出来ばえである。

35「景観から歴史を読む⑧豊臣秀吉の「首都」作り①」〔『NHK 人間大学』 1997 年 8 月 28 日・ETV・30 分〕

36「景観から歴史を読む⑨豊臣秀吉の「首都」作り」〔『NHK 人間大学』 1997 年 9 月 4 日・ETV・30 分〕

37「お城の国ニッポンを作った男たち～信長・秀吉・家康の城郭革命」〔『堂々日本史』 1998 年・放映月日不詳・NHK・45 分〕城は一面においては権力者の自己表現の「宣伝塔」であり、他面において時代の建築文化の最高水準の象徴でもある。長く続いた中世の山城の時代を経て、戦国末期わずか 30 年の間に、戦闘用の砦であった城は石垣と建築から成る巨大建築複合体へと変化、最終的には扇の勾配を持った石垣と白壁の城のイメージが出来る。番組では、なぜ城は短期間に飛躍的に進化をとげたのか、信長の「安土城」秀吉の「大阪城」そして家康の「江戸城」にいたる、彼ら権力者の理念と情熱、そしてそれを支えた工学的な技術革新の流れの両面からとらえようとする。現在、

全国で復元されている天守の数は 52、そのうち 40 までは戦後に復元されたものである。日本の城は、郷土のシンボル〔ランドマーク〕としてルネサンスの時代を迎えているとも言える。

38「大江戸・天下普請～将軍家光の威光～」〔『歴史誕生』 放映年月日不詳・NHK・45 分〕城は歴史のモニュメントである。戦乱の世の終息とともに、軍事拠点としての城は、都市形成の機軸そして権力を明示するメディア媒体そのものともなる。近世城郭の中で最大規模の「江戸城」について徳川三代にわたる江戸城拡張の経緯を綿密な考証のもとに、その視覚的復元を試みる。また安定した時代の到来とともに城郭技術の進化は停止するが、その建築技術はやがて一般民家・商家・豪農の館へと引き継がれて、明治以降の近代建築技術への準備段階を形成していくことになる。

39「景観から歴史を読む⑩徳川家康の江戸選定理由」〔『NHK 人間大学』 1997 年 9 月 11 日・ETV・30 分〕

40「復元・家康の城下～駿府・知られざる大御所政治」〔1997 年 6 月 28 日・BS2・60 分〕

41「伝統の町並みをどう残すのか」〔『クローズアップ現代』 1999 年 11 月 22 日・NHK・30 分〕歴史的町並みを多く有する古都京都を舞台に繰り広げられる「景観論争」をテーマとする検証番組。具体的事例として「京都ホテル」はその高さが景観を破壊するとして反対の声が上がる中で建設された。「JR 京都駅」は規模と近代的なデザインが古都にそぐわないとして批判された。そんな中で京都の老舗「俵屋」に隣接して高さ 17 m のマンション建設計画が持ち上がり、古都を愛する多くの人々が反対運動を起こした。番組は『建築の自由』と『景観保存』の対立の経緯について検証する。

42「地図を歩く～村上市(新潟)」〔『世界くらしの旅』 講師：榊間好男 1999 年 7 月 23 日・ETV・30 分〕地図を見て、地方の城下町の遺構を実際にたずね歩く試み。いわゆる「タウン・ウォッチング」の学習と、地図と実際の風景の重ね合わせという楽しみを紹介する。昔から武士階級の居住地域と

町民地域が厳然と分け隔てられていた名残りとして、それが今でも住民意識にも反映しているという点が興味深い。城下町の歴史遺産を生かしたまちづくりの運動も合わせて紹介される。

(3)地域活性化：都市計画と町（街）づくり

現代日本における「都市空間」の建設は、国や地方自治体という行政主導でおこなわれるものという暗黙の幻想が支配していた。いわゆる「ハコモノ行政」や自然環境のあくなき破壊と建築景観の暴力的変更がそこでは支配的であった。他方、「町（街）づくり」は地域住民の参加を意味する。無論、両者は二項対立するものではなく弁償法的に新たな価値感を作り出す動きとして、市民運動の具体的な方法論を含めて「現代都市論」の射程に入ってくるであろう。

43「新たな地域連携をめざして～地域戦略プラン・シンポジウム」〔『金曜フォーラム』2000年3月3日・E T V・70分〕市町村の広域的連携を軸に、新たな地域づくりを考えるシンポの模様を伝える。政府は21世紀に向けて活力にあふれ、魅力ある地域社会を実現するために平成11年度(1999)から5年間にわたり、総額およそ4兆円の「生活空間倍增戦略プラン」の一環として「地域戦略プラン」を推進している。このプランにより、複数の地方自治体が広い範囲で連携し、地域主体の新たな地域づくりをめざしている。すでに日本全国で460件がプランとして国から認定され、具体的な事業をスタートさせている。この番組では、日本各地で動きだしたプランを検証し、いちだんと魅力ある地域戦略を探ろうとしている。パネラーは、①地域社会と交通体系、②日本経済の地域構造の再検討、③交通工学と地域計画、④自治体への有識者の助言のありかた、⑤新聞ジャーナリズムの視点から見た地域経済、などの立場から参加している。

44「地域連携と街づくり～豊かな生活空間をめざして」〔『金曜フォーラム』2000年4月21日・E T V・70分〕少子化、高齢化、情報化社会を迎える中で、

新しい価値観に基づく地域づくりのあり方、地域の交流と連携について討論する。パネラーは地域交流センターの田中栄治、ジャーナリストの幸田シャーミン他。

45「これからのまちづくり」〔『教育セミナー』2000年1月27日・E T V・30分〕この番組では「まちづくり」の定義として、行政主導の基本計画策定を意味するのではなく、①住民主体で、②地域やまちとの関わりを深め、③地域・まちを学習し、④総合的に改善することを意味する。とりわけ子供たちの目線（めせん）を射程に入れた「総合化」は「建設・道路・医療保健設備の充実」と言った縦割り行政のあり方や高層マンションと日照権／高速道路建設といった「まちこわし」に対する異議申し立てとしてバブル経済の崩壊と平行して生まれた。住民ボランティアによるアイデアあふれた公園作りや、女性の視点からみたまちづくりといった運動がどこまで息の長い地域活動として日本人の生活意識に根づいていくかは今後の推移を見守る必要がある。V T R事例：長野県飯田市の中学生と市民主体の「りんご並木通り」の整備。

46「町づくりに挑戦～愛知県西尾小の総合的な学習」〔『教育トゥデイ』2000年1月27日・E T V・30分〕2002年から導入される小学校の「総合的な学習」についての先駆的な教育実践報告の番組であるが、町を丸ごと教科書とみなし、町を学習の現場とみなすという新しい発想がみられる。古い城下町の西尾も、郊外大型店の進出にともない地元商店街は活性化の問題に直面していた。小学生が現実をしっかりと見つめ、考えそして具体的な夢を描きそれが町づくりプランへと総結集していく過程が丹念に描かれている。とかく日本では希薄と言われる市民の地域行政への参加意識を、小学校教育の中で培う「総合的な学習」の可能性を模索する。その中で子供たちは夢と現実の調和のあり方を学ぶであろう。子供たちへのアンケートでいちばん多かったのが『知らない町の人に質問する力がついた』とのこと。まさに「まちづくり学習」をとおしてコミュニケーション能力の育成も可能となる。

47「まちが暮らしを創り、暮らしがまちを育む～地域活性化の推進と課題～」〔『金曜フォーラム』2000年3月3日・E T V・70分〕1999年10月に埼玉県川越市で開催された「地域づくり東日本交流会」のパネルディスカッションには全国の地域づくりにたずさわる人々が大勢参加した。「歴史を活かした住民主体の街づくり」にどう取り組むかという問題についてパネリストの活発な意見交換が行われ、V T Rではいくつかの具体例が紹介される：①川越市～「蔵」という伝統的建造物を活かした街の活性化の取り組み。電柱・電線を地下に埋め込み町並みに適合したすっきりしたスカイラインを復元した。②滋賀県長浜市～郊外的大型店舗の進出に奪われた北国街道沿いの商店街が「ガラス」をテーマに新しい街作りに成功、集客能力も回復した。③岐阜県古川町～人口1万6千人の1%にあたる150人が大工さんという、まさに飛騨の匠の多く住む町の特性を活かし、市内を流れる川の整備、伝統建築の推進に組み「景観デザイン賞」受賞した。画一的な建築基準法と「伝統的建造物群保存地区」における新しい住居建設の整合性の問題がとくに興味深い。

48「早稲田の主役は中高年です～商店街活性化の試み～」〔『BS列島情報』2000年2月28日・NHK/B S 1・35分〕年々若者が減る早稲田大学周辺の7つの商店街（店舗数420）では、中高年を対象にした町づくりを進めている。新しい客層として大学の主催する中高年向けの講座を受講している約2万人の社会人である。受講する社会人はそれぞれの関心に応じて約20の同好会が作られその中には町づくりにかかわるものもあり、地域の活性化に関心を持ったサークルもある。商店街では高齢者向けの「宅配サービス」（シルバー御用聞き）も計画されるなど、きめの細かいサービスで生き残りを図ろうとしている。

49「復活するか、わが街の商店街」〔『クローズアップ現代』1999年8月2日・NHK・30分〕全国に約1万8千ヵ所あると言われる「商店街」の多くが現在「空洞化」の危機にさらされている。その原因としては郊外大型店舗の進出・車を用いた買

い物の利便性・高齢化などが上げられる。1998年7月には現状打開のために「中心市街地活性化法」が施行され総額で一兆円の補助金を伴う、街再生へのプロジェクトが立ち上がった。しかし補助の前提となるT M O (Town Management Organization) という事業主体の立ち上げが大幅に遅れているために、この法律がうまく機能していない。行政主導に慣れきった市民の主体的意識の立ち遅れや、T M Oに必要な経営感覚の乏しさ、後継者不足といった要因をいかに克服するのか―「青森県三沢市・福島県会津若松市・奈良県奈良市」を事例として考える番組。

50「バリア・フリーの街づくり～誰もが安心して歩けるために～」〔『金曜フォーラム』1999年7月23日・E T V・70分〕道路は都市空間において住民の移動のための線的空間であるが、普段歩いている道にはいくつかのバリア〔障害・障壁〕が存在する。①電柱・標識②放置自転車③駐停車の車④大通りから抜け道を求めて進入する車など。「安全に安心して町を歩く」という当たり前のことが実現するためには「歩道の段差の解消・道路上の標識の撤去・車の速度を落とす試み」などが必要である。他方では「ノーマライゼーション」という概念が都市計画に導入されるようになり、高齢者・障害者・障害を持たない人のすべてが人間として普通の生き方を送るための都市作り。また誰もが住みやすい・使い勝手のよい都市空間の「ユニバーサル・デザイン」の実現のためにどのような町づくりや意識改革が必要かについて議論される。

51「高齢化社会の都市（安藤忠雄）」〔『視点論点』1999年8月9日・E T V・10分〕ヨーロッパの街の事例を参考に、安藤氏は高齢化社会の都市のイメージとして、次の3点の融合を提唱する。①集合住宅に隣接したさまざまな商業施設 ②都市の立体的利用として2階部分を公園化する〔車道との完全分離で安全性を確保する〕③老人ホームのような同世代の人間のみを集めて管理する隔離ではなく、世代を越えた対話の可能な空間〔心のバリアフリー〕。

52「ニュータウン30年目の模索～高齢者に優しい街

造り～」〔『クローズアップ現代』1998年放映月日不詳・NHK・30分〕豊かな緑の囲まれた「多摩ニュータウン」は、東京の西部4つの市にまたがり、総面積3000ha 人口17万人が住む町である。高度経済成長時代に東京に集中した労働人口とその家族を居住空間確保のため理想型として計画されたが、30年前に入居した人々の高齢化に伴い、町づくりの再検討が必要になっている。とくに集合住宅の階段の昇降や、坂の起伏や階段の多い丘陵地は、高齢者の負担になっている。「近隣センター」は、地域住民の高齢化と幹線道路から離れていることにより客離れが進み、5軒に1軒はシャッターを下ろしている。また建物の老朽化に対応する分譲住宅入居者の住民主導による立替え計画〔等価交換方式〕は、行政サイドの都市計画の規制〔容積率・建ぺい率〕という壁に突き当たっている。白紙の土地に都市計画の設計者が描いた絵柄が、住民が生活し始めて問題に突き当たり、その絵柄に変更要請が生じた時に都市計画という制度の硬直性が浮き彫りにされる。従来の都市計画の制度疲労の一面が現れている。ただしニュータウンは街づくりの実験のトップランナーであり、これからも豊かな緑を生かした新たなニュータウン造りの実験となるポテンシャルを秘めていることは確かである。（→関連映像資料：53, 54, 55）

53「都市計画権限と町づくり・第7回『地方分権を考える』」〔『市民大学講座』講師：新藤宗幸、1996年11月19日・ETV・30分〕

54「市民語でかたれ『分権』」〔『視点論点』講師：樋口恵子 1995年放送日時不詳・ETV・10分〕

55「市町村合併は住民に何をもたらすか」〔『BSフォーラム』2000年4月8日・NHK/BS1・70分〕

56「街はよみがえるか ①商店街の危機 ②新しい都市像を描く」〔ETV特集 1999年6月30日/7月1日・ETV・各45分〕「商店街の空洞化」現象が地方都市をむしばんでいる。大型ショッピングセンターの進出により地域文化や教育など、これまで商店街がコミュニティに果たしてきた役割が失われ地域社会の崩壊が始まっている。官民一

体となった取組で、商店街の再生に成功した米国の例〔フィラデルフィア市〕を検証しながら商店街の役割を見つめ直し再生のかぎを探る2回シリーズ。1回目は青森県三沢市の現状をレポートする。2回目は世界のいくつかの都市における町おこしの試みをVTRで詳細に紹介する。フィラデルフィア市マニヤンク地区、パリ市のパサージュ、ドイツ/フライブルク市の「パーク・アンド・ライド（Park and Ride）」の試みは注目される。

57「21世紀の都市はどうなるのか」〔ETV特集 1996年7月15～17日・ETV・各45分〕①居住権をどう認めるのか～都市化する地球の課題。現在、世界の都市で急激な人口の膨張が起きている。2025年に地球の人口は80億になりその3分の2が都市で生活し、人口1000万人以上の都市は20を越えると言われている。仕事や現金収入を求めて都市部に人が集中することにより、様々な問題や矛盾が生じ、世界は困難な課題に直面している。生活環境の悪化、水や食料の確保、ごみ処理やホームレスの問題。国連は「人間居住会議」を開催した。世界は都市化という問題にどのように取り組もうとしているか。3回に渡ってその内容が報告される。1回目は人権の一部を構成する「居住権」の質が議論される。②世界の都市は模索する～住民主導型への取り組み。都市問題への取り組みについて国連が募集した「ベスト・プラクティス」に対し各国から寄せられたビデオレポートを紹介する。③災害からどう復興するのか～震災都市からの報告。会議には、阪神大震災の被災者から構成される日本からのNGOも参加した。最も豊かな国と思われている日本において、政府の対応や復興の過程に各国から疑問が提出される。阪神大震災を世界はどうとらえているかが報告されているが、とりわけ明らかになったのは、震災により崩壊した地域住民のコミュニティの復興に政府は無関心であるという点である。

58「現代の都市問題」〔『世界くらしの旅』1999年12月10日・ETV・30分〕

59「伝えよう水と緑のあるくらし～古都奈良からのメッセージ」〔『金曜フォーラム』1999年放映月日不

詳・E T V・75 分〕都市と自然の接点においては現在さまざまな矛盾が生じている〔例：生態系の破壊〕。このシンポジウムでは、既存の「河川法」を基盤として、都市の改造プログラムに「水と緑の保全」を効果的に組み込んでいくための戦略について議論される。とりわけ都市の人口を養う「水」の供給量と「奈良から京都への遷都」問題が実証的に論じられている点が興味深く、また現代の都市問題を考える上でも示唆的である。

60「都市の再編成と活性化～ヨーロッパ統合と近畿圏」〔『金曜フォーラム』2000年3月10日・E T V・70 分〕1999年12月大阪で「快適都市へのシナリオ～大近畿圏は可能か」というテーマで都市の再編成と活性化について考えるフォーラムが行われた。経済地盤の長期的低落が問題となっている近畿地方では、地域活性化の様々な試みが行われてきた。しかし歴史や生い立ちの違う都市の再編成は非常に難しい。フォーラムでは、ドイツの新首都ベルリン市と統合通貨のユーロ圏の動きを射程に入れながら、既存の都道府県という行政単位の有効性について議論される。VTR 映像資料：ベルリンの都心再開発計画（ポツダム広場／ヘルムート・ヤーンの設計になるソニー・センター／レアーター駅の再開発の様子）。また、パネラーとしてマルチ・メディアの専門家が参加しているのが注目される。

61「光の文化と都市景観～世界夜景会議～」〔『金曜フォーラム』1995年12月6日・E T V・70 分〕地球規模での情報交流が進み、世界の都市はこれまでもまして24時間活動を続けている。都市のライトアップも新しい文化として認められるようになった。こうしたことを受けて、1995年7月に大阪で世界8カ国13都市からの報告者を招いて「世界夜景会議」が開かれた。世界の夜景の美しい町からの報告の他、安全な市民生活のための照明や照明と環境問題などのいくつかの討論が行われた。番組ではその中の「光の文化と都市景観」シンポジウムの様子が紹介される。

62「世界に見る首都機能移転～日本は何を選択するのか」〔『B S フォーラム』1997年8月30日・N

H K / B S 1・75 分〕現在、日本で都市問題の一つとなっている『首都機能移転』に関して、世界の都市を事例に検討する。①キャンベラ（オーストラリア：環境中心の集約的都市）②ブトラジャヤ（マレーシア：情報中心の新首都構想）③ロンドン（英国：首都機能の分散）関連してドイツのベルリン新首都移転と「分散分都」の実例を見る。

63「国際共同制作・地球白書②巨大都市・未来への選択」〔1999年11月19日・B S 1・60 分〕地球環境問題の世界的権威であるアメリカのワールドウォッチ研究所が地球の診断書として出版している『地球白書』をもとに、国際共同制作で、地球環境問題を解決するために、今人々や企業がどのような変革を迫られているのかを問いかける6回シリーズ。この100年の間の都市の人口は15倍に膨れ上がり、20年後には世界の人口の4分の3が都市で暮らす事になると言われている。番組では、産業革命以降、都市問題の悩みを抱えつつけるロンドン、伝統的農業を残しながら膨張するカイロ、急激な経済発展を遂げる上海を取材。また交通やゴミ問題の解決のために市民の協力による環境に優しい街づくりを進めているブラジルのクリチバの先進的な試みを紹介。21世紀の都市のあり方を問う。

64「日本の未来と首都機能移転」〔『金曜フォーラム』1999年11月19日・E T V・75 分〕

65「映像メディアが地域を拓く」〔『土曜フォーラム』1994年5月4日・E T V・70 分〕

66「21世紀の都市再生をデザインする～北九州市・未来への挑戦～」〔『B S フォーラム』2000年3月25日・N H K / B S 1・75 分〕

67「都市防災とライフライン～阪神大震災から5年」〔『金曜フォーラム』2000年2月25日・E T V・70 分〕

68「都市防災を考える～災害医療～」〔『B S フォーラム』2000年1月15日・N H K / B S 1・60 分〕

69「震災と歴的町並み保存」〔『あすを読む』永井多恵子 1996年10月29日・N H K・10 分〕

70「復興と生存権」〔『視点論点』1996年・放映月日不詳・E T V・10 分〕

71「震災から5年～復興への提言」〔NHK特集 2000年1月17日・NHK・70分〕

72「コンクリート高齢化社会の警告～老朽化にどう立ち向かうのか」〔2000年6月4日・NHK・60分〕
トンネルや橋、マンションなどコンクリートを使った構造物の多くに異変が起きている。建設庁などによる実態調査で多くのトンネルや橋で劣化現象が発見された。山陽新幹線での取り組みや米国での事例などから「コンクリート高齢化社会」の未来像を探る。

73「新たな都市災害・地下浸水は防げるか」〔『サイエンスアイ』2000年7月8日・ETV・45分〕

74「安心して家が買えるか～スタートした住宅品質保証制度」〔『金曜フォーラム』2000年6月3日・ETV・70分〕

75「なぜ都市は暑いのか～検証・ヒートアイランド現象」〔『クローズアップ現代』2000年7月26日・NHK・25分〕

76「次世代都市計画への第一歩」〔『視点論点』小林重敬 2000年1月19日・ETV・10分〕

(4)現代都市と建築文化

77「新しい都市風景の創造～アーティストによる都市形成の試み」〔1988年放映月日不詳・ETV・70分〕

78「ベルリン・空間芸術家の挑戦～梱包された旧帝国議会議事堂」〔1999年8月6日・NHK/BS1・60分/1996年ドイツ製作〕

79「ベルリンの挑戦・21世紀の美術都市」〔『日曜美術館』1994年7月3日・ETV・45分〕

80「世界歴史都市散歩・ベルリン」〔1988年放映月日不詳・ETV・30分〕

81「ポツダムとベルリンの公園と宮殿」〔『世界遺産』1996年8月18日・BSN<TBS系列>・30分〕

82「ヴァイマルとデッサウにあるバウハウスとその関連遺産」〔『世界遺産』1998年3月15日・BSN<TBS系列>・30分〕

83「建築家ブルーノ・タウト～ユートピアを求めて」〔『新日曜美術館』1999年・ETV・45分〕

84「中世都市ローテンブルク」〔『ドイツ・ロマンチック街道』NHK・10分〕

85「ドイツ・バウハウスからすべてが始まった」〔『世界わが心の旅』柏木博 1996年8月22日・NHK/BS2・45分〕

86「つくりものの力と効能・建築と美術の中で考える」〔『未来潮流』1998年6月12日・ETV・60分〕

87「フランク・ロイド・ライト」〔『20世紀人物列伝』1998年11月7日・NHK/BS1・60分〕

88「ル・コルビジユ」〔『20世紀の群像』1992年・ETV・120分〕

89「磯崎新・建築することの『悲劇』」〔『未来潮流』1998年5月9日・ETV・75分〕

90「コンクリートは熱く冷たく・安藤忠雄の建築論」〔『新日曜美術館』1999年6月27日・ETV・45分〕

91「建築家・安藤忠雄・私は都市と格闘する」〔1996年8月3日・ETV・45分〕

92「立原道造・詩と建築・夢見たものは・・・」〔1998年11月12日・ETV・45分〕

93「都市を見つめる①佐伯俊三とパリ」〔『新日曜美術館』1998年10月11日・ETV・45分〕

94「都市を見つめる②松本俊介の東京」〔『新日曜美術館』1998年10月18日・ETV・45分〕

95「紙で建てる巨大パビリオン～ハノーバー万博・日本人建築家の挑戦」〔2000年5月5日・NHK・50分〕2000年6月から開かれているハノーバー万博は地球環境がテーマ。画期的な建築として注目度ナンバーワンなのが日本館である。縦72メートル、横35メートル、高さ15.5メートルのこの巨大なドームは屋根や壁はもちろん、建物を支える構造材までほとんどが再生紙で造られている。このパビリオンを設計したのは「紙の建築家」として知られる坂茂(ばんしげる)氏。紙であるがゆえの難題を克服するため仲間とともに試行錯誤を繰り返してきた。番組では坂氏の夢を挑戦を追いかける。

96「21世紀の文化発信都市へ・イベント学会・浜松」〔『金曜フォーラム』2000年5月5日・ETV・70分〕

(5)都市環境・建設都市工学

97「川・橋・道と街づくり」〔『金曜フォーラム』1997年11月21日・E T V・70分〕

98「道路の快適空間への展開～『道の駅』にみる新時代の道づくり～」〔『金曜フォーラム』2000年5月19日・E T V〕

99「21世紀の道づくり」〔『金曜フォーラム』1997年11月21日・E T V・70分〕都市環境保護の取り組みで有名なドイツ・フライブルク市の事例を紹介。

100「海峡都市はどう生き抜くのか～橋や海底トンネルで結ばれ転機を迎える海峡都市～」〔『BS フォーラム』1998年放映月日不詳・B S 1・60分〕

101「国土開発と地域振興」〔『世界くらしの旅』1999年12月8日・E T V・30分〕

102「社会を支える基盤をどう築くか～治水の国オランダに学ぶ」〔『金曜フォーラム』2000年7月7日・E T V・70分〕

103「市民参加の『川づくり』をめざして～情報化と土地利用」〔『金曜フォーラム』2000年7月28日・E T V・70分〕

104「大量消費社会とゴミ問題」〔『世界くらしの旅・現代の都市問題』1999年12月8日・E T V・30分〕

105「地球環境と日本～途上国の都市問題を考える～」〔『金曜フォーラム』1999年10月15日・E T V・70分〕

106「建築探偵・近代日本の洋館をさぐる」〔『NHK人間大学』講師：藤森照信 1998年10～12月・E T V・各30分〕明治から昭和初期にかけて『王』と呼ばれた実業家たち。彼らが自らのために建てた邸宅とは？豊富な映像資料を駆使して全国に現存するユニークな西洋館を訪ね、施主たちの生涯と、日本の西洋建築の歴史を語る。①石油王～重箱詰め西洋館（新潟市・新津記念館（旧新津恒吉邸）②生糸王～金唐紙のインテリア（小樽市・旧日本郵船株式会社小樽支店／岡谷市・林家住宅）③タバコ王～赤煉瓦の館（京都・旧村井吉兵衛別邸）④義齒王～四重塔をもつ洋館（京都・旧松風

嘉定邸）⑤北前船王～海から見る館（福井県・旧右近権左衛門邸）⑥石炭王～能舞台をもつ豪邸（佐賀県唐津市・旧高取伊好邸）⑦下駄長者～インテリアが決め手の館（広島県福山市・旧丸山茂助邸）⑧肥料王～浜辺のあかがね御殿（兵庫県加古川市・旧多木米次郎邸）⑨山林王～展望塔をもつ館（三重県桑名市・旧諸戸清六邸）⑩大理石王～大理石の歴史博物館（岐阜県大垣市・旧矢橋亮吉邸）⑪ワイン王～ブドウ尽くしの和洋館（千葉市・旧神谷傳兵衛別邸）⑫鉄道王～インテリアは博物館（静岡県熱海市・旧根津嘉一郎邸）

107「都市と大学の世界史～新しい大学像を考える」〔『NHK人間大学』講師：樺山紘一 1998年4～6月・E T V・各30分〕世界の主要大学の発展は、都市社会の成長とともに会った。2人に1人が大卒という超高学歴社会の到来を迎え、世界の中で大学の役割を考える。取り上げられる都市：パリ、ボローニア、オックスフォード、ベルリン、ハーバード、アズハル（イラン）、北京、ソウル、京都、大阪、東京。

108「建築・集落からの教え」〔『NHK人間大学』講師：原広司 1993年10～12月・E T V・各30分〕世界に点在する集落は歴史や文化は異なりながらも、不思議なまでの類似や一致点がある。この「多様性の中の普遍性」に注目した建築家が「集落の教え」から現代建築文化を読み解く。＜講義タイトル＞①建築と集落 ②塔 ③住居 ④屋根 ⑤壁 ⑥広場 ⑦地形 ⑧水 ⑨土と石と木 ⑩幾何学 ⑪風景 ⑫現代建築の可能性。

109「日本の風土性」〔『NHK人間大学』講師：オギュスタン・ベルク 1995年10～12月・E T V各30分〕和辻哲郎が切り拓いた「風土論」をさらにすすめて、田園・都市・風景への日本人とフランス人の眼差しを比較・分析する。近代世界の中で失われた調和の世界－アメニティやエコロジーをふまえた日本独自「風土性」の復権を提言する。＜講義タイトル＞①和辻哲郎が見つめた風土 ②歴史的記念物が語る時間と空間 ③風土を見つめる眼差し ④北海道－風土性の再生産 ⑤北海道－あらたな風土の誕生 ⑥風景を見つめる眼差し

⑦発明された田園風景 ⑧都市へ持ち込まれた田園風景 ⑨「都市」の図式と「みやこ」の図式 ⑩川と都市性・神田川と風土性 ⑪近代建築が破壊した風土性 ⑫近代性を越える眼差し。

110「建築に夢をみた」〔『NHK人間講座』 講師：安藤忠雄 2000年4～6月・E T V・各30分〕
独学で建築を学び、日本を代表する建築家として世界的な評価を受ける安藤忠雄が、歴史に残る世界の名建築とそれらに影響を受けた自身の作品を紹介しながら、人間を取り巻く「建築」の魅力を探っていく。〈講義タイトル〉①住まい ②集まって住む ③広場 ④都市Ⅰ ⑤都市Ⅱ ⑥都市Ⅲ ⑦コラボレーション ⑧場をつくる ⑨人を育てる場 ⑩復興から ⑪庭園 ⑫つくりながら考える。

5 まとめ

先に紹介したように、テレビ・メディアは実に様々な問題をテーマとして取り上げていることが分かる。このことは、メディアの送り手が、視聴者の潜在的関心を喚起するという側面と、視聴者側が顕在的に抱いている関心にそくして番組を構成するという二つの要因が考えられる。いずれにせよ、映像情報には、たとえそれがカメラマンの主観のフィルターをすり抜けて、スタジオでの編集プロセスを通して構成された「現実そのもの」ではないにせよ、プリント・メディアすなわち活字情報では得られない多くのリアルな都市風景を切り取り、視聴者に提示してくれる。ただ残念なのは繰り返しになるが、一度放映された番組は、その後の情報アクセスがほとんど不可能であるということである。今回の研究で収集され、リファレンスとして整理された100以上の番組は、いずれをとっても「都市問題」の中身がじつに多くの要因で形成されていることを概観するために十分な情報量であると言えよう。

最後に一言、今後の現代都市論の教育内容について簡単に展望しておきたい。現代の大学生の一般教養知識が相対的に低下している現状はすでに

数年前から指摘されてきていることである。たしかに社会科関連科目、具体的には地理や歴史が必須科目として学習されていることがのそましいのではあるが、現時点ではそれが期待できない点が、教育上の一つの限界を構成している。たとえば、本研究でも紹介したE T Vの教育番組として放送されている「世界くらしの旅」については、主たる受講対象は高校生であるが、大学の教養教育として「現代都市論」が開講される場合に、すべての学生がこの番組の内容程度の基礎知識をすでに習得していさえすれば、すでにかかなりの程度の動機づけなしインセンティブが得られていると言える。すなわち、一般教養科目としての「現代都市論」がその基礎としてどういう科目の上に立脚しているかの再考が今一度検討されねばならない。言い換えると「現代都市論」の主たる受講生としての大学一年生の知的関心が、高校までのどのような基礎科目の上に立脚しているものなのか、どういう分野の問題としてその関心が引き継がれているか、そうした調査も必要となるかもしれない。つまり、「現代都市論」というときに学生がイメージするものは何なのかということである。幸いにして平成12年度からのセメスター制への移行にともない、従来の通年科目であった「現代都市論」は、「現代都市と私たちの生活」そして「現代都市の生活空間とその形成」と、講義題目を変更することにより、かなり学習されることの中身が見えやすくなったことは確かである。

現代都市論を形成する社会科学的な理論が、自然を計画的に改変し、そして自然を人間の理性で克服するという西洋の合理主義的科学観の枠組みにもとづいているとすれば、そのような現代都市論もまた、科学的合理主義の限界を背負っていることになるはずである。そのことに気づかず、科学の無謬性に安易に乗っかっている人がいるとしたら、それはあまりにも楽観的であろう。

今後の現代都市論は、サブテーマとしての「ハードウェア」から「ソフトウェア」へ大幅なシフトが必要となるだろう。それは従来の科学的思考が忘れかけていた「人間の生命」である。生命の

大切さをもう一度思い出すためのきっかけが今社会のいろいろな局面で起きている。たとえば、現代都市と犯罪，社会病理，現代都市とメディア，現代都市と防災，自然災害などは，その激しい揺さぶりによって現代都市が内在する諸問題を一挙に露呈させる。すなわち生命を守るために生まれたヒトのすみかたとしての都市が，多くの生命を脅かす要素を含んでいるということと，そうして生命の危険に対して都市はかなり無防備であるということである。

ここでは詳述できないが，「阪神淡路大震災」から5年目にあたる2000年1月に，NHKは4つのチャンネルを利用して，長時間にわたる震災特集を組んだことは評価されている。そこには先述の現代都市の諸問題が豊富な映像資料で語られていて，AV教育という側面から説得力のある教材を形成していることを付け加えておきたい。

〔注1〕

「オムニバス形式での総合講座『現代都市論』の教育効果をあげる工夫』高津斌彰／吉田和比古／池上岳彦／永井雅人／栗原隆共著「大学教育研究年報」新潟大学大学教育開発研究センター 第3号 P.133-144. 1997年

〔注2〕

1999年度の授業シラバスは以下の内容となっている（担当教員名は省略した）①現代都市の概念：都市化・都市問題②南米の都市形成と新しい都市住民：その文化・コミュニティ③行政：市民の自由・自治，フランスの都市計画と法④都市の経済問題：地価と土地利用⑤現代都市の財政構造と問題⑥都市生活と大衆⑦都市社会とインフォマライゼーション⑧現代都市の景観と都市美（ドイツの都市）⑨現代市民と都市計画⑩現代都市環境と明日の都市計画⑪社会病理と逸脱行動⑫結論：21世紀の都市とそのすみかた。